

氏名(本籍)	くろ だ ゆう し 黒田 祐二(栃木県)		
学位の種類	博 士(心理学)		
学位記番号	博 甲 第 3035 号		
学位授与年月日	平成15年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	心理学研究科		
学位論文題目	中学生の友人関係における目標志向性が抑うつ傾向に与える影響		
主査	筑波大学教授	教育学博士	新井 邦二郎
副査	筑波大学助教授	教育学博士	桜井 茂男
副査	筑波大学助教授	教育学博士	服部 環
副査	筑波大学講師	博士(心理学)	坂入 洋右

## 論文の内容の要旨

### (1) 論文の目的

主な目的は2つある。ひとつは、中学生の友人関係における目的志向性と抑うつ傾向との関係を検討することである。具体的には、Dweck & Leggett (1998) に従い、他者と関わる経験によって自分を成長させようとする「経験・成長目的」は抑うつ傾向と負の関係にある、自分の性格について悪い評価を避けようとする「評価回避目標」は抑うつ傾向と正の関係にある、という仮説を検討することである。さらにDweck & Leggettとは対立する仮説になるが、自分の性格についてよい評価を得ようとする「評価接近目標」は抑うつ傾向と負の関係にあるという仮説を検討することである。

ふたつ目は、中学生の友人関係における目標志向性と抑うつ傾向との間に介在するメカニズムを、素因ストレスモデル、ストレス生成モデル(ディストレス生成モデルとユーストレス生成モデル)から検討することである。素因ストレスモデルとは「ストレスが生じたとき、その影響を目的志向性が促進(ないし緩和)することにより、抑うつ傾向も促進(ないし緩和)される」というモデルである。一方、ストレス生成モデルとは「目標志向性が対人行動を通して、ストレスを誘発(ないし抑制)することによって、抑うつ傾向も促進(ないし抑制)される」というモデルである。なお本論文では、ストレス生成モデルは、従来のようにネガティブな出来事に焦点を当てた「ディストレス生成モデル」とポジティブな出来事に焦点を当てた「ユーストレス生成モデル」とに区別される。

### (2) 論文の概要

本論文は、第1部「序論」、第2部「実証的検討」、第3部「総括」から構成されている。

第1部「序論」は、第1章から第6章までの6つの章で構成され、子どもの抑うつ傾向を検討する意義、抑うつ傾向が発生するメカニズムについてのこれまでの理論などが紹介された後、論文の目的がまとめられている。

第2部「実証的検討」は第7章から第9章までの3つの章で構成され、第7章では友人関係における目標志向性と抑うつ傾向との関係がおもに検討されている。まず友人関係における目標志向性を測定する尺度が開発され、続いてそれを用いて、友人関係における目標志向性と抑うつ傾向との関係が重回帰分析によって検討されている。仮説はほぼ支持され、友人関係における経験・成長目標と評価接近目標は抑うつ傾向と負の関係にあり、評価

一回避目標は抑うつ傾向と正の関係にあることが判明した。この結果は、学年、男女を問わず広く認められた。

第8章では、友人関係における目標志向性と抑うつ傾向との間に介在するメカニズムとして素因ストレスモデルを取り上げ検討がされている。縦断的な研究によると、①経験・成長目標が高い場合には、ストレスが生じたときに相手との関係を積極的に修復したり、ストレスをポジティブに認知する対処方略取ったりして、ストレスの影響を受けにくくし、その結果抑うつ傾向にも陥りにくくなること、②評価一回避目標が高い場合には、ストレスが生じたときに、ストレスを嫌悪的に認知し友人関係全般から引きこもるがために、ストレスの影響を受けやすく、その結果抑うつ傾向が高まりやすいこと、などが明らかにされた。

第9章では、友人家計における目標志向性と抑うつ傾向との間に介在するメカニズムとしてディストレス/ユーストレス生成モデルを取り上げ検討されている。縦断的ならびに横断的な研究によると、行動過程では、おもにユーストレス生成モデルにおいて、①経験・成長目標が高い場合には、友人との関係構築・維持のために友人に積極的に働きかけたり、親切で友好的な行動を取ったりして、友人関係においてポジティブな出来事を経験しやすく、その結果抑うつ傾向に陥りにくくなること、②評価一接近目標が高い場合には、友人との関係構築・維持のために友人に積極的に働きかけるため、ポジティブな出来事が経験され、その結果抑うつ傾向に陥りにくくなること、③評価一回避目標が高い場合には、友人との関係構築・維持のための積極的な振る舞いができなくなり、ポジティブな出来事が経験しにくいために、抑うつ傾向に陥りやすくなること、などが明らかにされた。一方、認知・感情過程では、①経験・成長目標と抑うつ傾向との間には、ディストレス/ユーストレス生成モデルにおける認知・感情過程の介在は示されなかったこと、②評価一接近目標が高い場合には、友人からのよい評価に期待と注意を向けるため、友人からポジティブな反応を敏感に感じ、抑うつ傾向が抑制されやすいこと、③評価一回避目標と抑うつ傾向の間には、ディストレス/ユーストレス生成モデルにおける認知・感情過程の介在は示されなかったこと、などが明らかにされた。

第3部「総括」は第10章から第13章の4つの章から構成され、研究の要約、研究の意義、教育的介入への示唆、研究の限界と今後の課題がまとめられている。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、中学生を対象に、友人関係における目標志向性を測定する尺度を開発し、その信頼性と妥当性を確認した上で、それを用いて抑うつ傾向との関係、さらには目標志向性と抑うつ傾向との間に介在するメカニズムについて解明しようとした画期的な論文である。まず第一に高く評価できるのは、友人関係における目標志向性を測定できる尺度を開発した点である。信頼性も妥当性も高く、今後の研究に大いに役立つものと期待される。つぎに評価できるのは、この尺度を用いた研究において、新たな知見が数多く見いだされた点である。その中でもとくに、評価一接近目標が抑うつ傾向と負の関係にあることを仮説し、それを検証した点はきわめて高く評価されよう。また、ユーストレス生成モデルの提唱とその検証にも高い評価が与えられるものと思われる。しかし、全く問題がないわけではない。研究全体が質問紙法で行われているため実際の行動との関係が明らかではない点、さらに教育的な介入のためにはさらに現場での研究が必要である点などである。これらは今後の研究課題となろう。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。